

# 百舌鳥古墳群

35期生

## I テーマ設定の理由

登・下校の途中、深井駅と中百舌鳥駅間の高架から、こんもりと茂った幾つかの山、が一望できる。手前に土師にさんざい古墳、晴れた日には大仙古墳（仁徳陵）、百舌鳥山古墳（履中陵）などもはっきり見える。

いつもは身近に感じているこのような文化財でも、知っているようで案外知らないことが多い。そこで身近な堺市の文化財として、この百舌鳥古墳群を調べることにした。

## II 研究方法

### (1) 文献による調査

- ・ 古墳群を形成する各古墳について  
規模・形態・年代・現状・その他
- ・ 古墳群について
  - ・ 築造の技術
  - ・ その他
- ・ 被葬者について
  - ・ 巨大古墳と大王
  - ・ 古墳の年代と支配者
  - ・ その他

※ 本当は、古墳の被葬者というのは誰かということをはっきりと言えないため、「伝仁徳陵」などと書くのが望ましいが、ややこしくなるので、できるだけ地名をつけた名（大仙古墳など）で呼ぶことにした。

### (2) 実地調査

- ・ 古墳の周囲の環境、様子
- ・ 盛土採集場所といわれる所

## III 研究結果

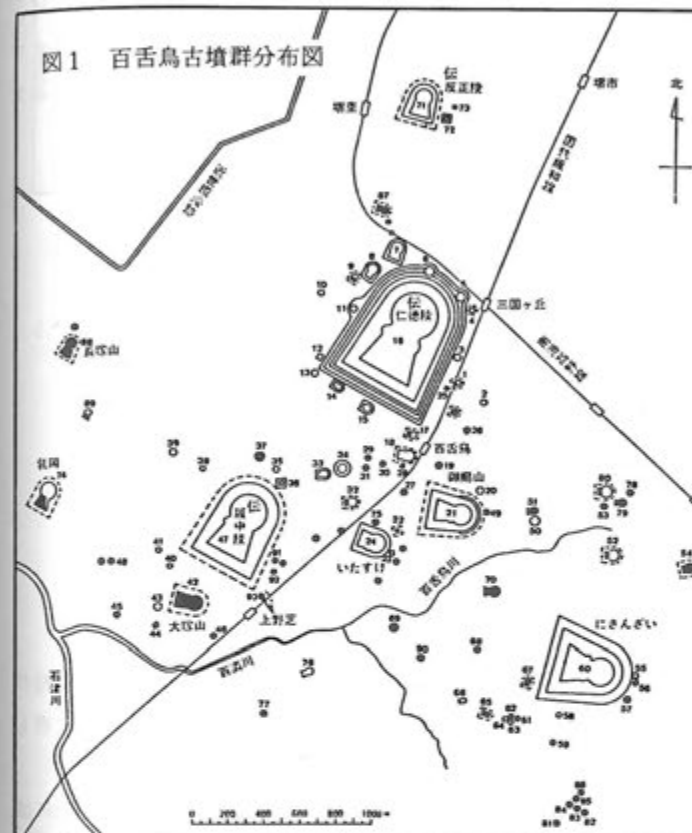
### (1) 文献による調査

- ・ 各古墳の分布（図1） 消滅・現存を含めた93基の分布
- ・ 各古墳について 紙面の都合で省略するが、集計したものを載せておく。

形態	前方後円墳 32基(21基)うち、帆立貝式 9基(6基)
	円墳 53基(21基) 方墳 7基(5基)
規模 (全長)	~30m 26基(14基) 30~50m 7基(7基) 50~100m 14基(9基)
	100~200m 8基(6基) 200~300m 1基(1基) 300m~2基(2基)
	不明 34基(8基)

年代	古墳時代前期 0基	中期 70基	後期 2基	不明 20基
現状	墳墓地 9基	山林・原野 40基	宅地 39基	畑地・水田 6基
	用地・敷地(学校・公園などの) 4基			(重複するものを含む)

( )内は現存



(黒印及び点線は、消滅した古墳又は消滅した部分)



### <上の表から考えられること>

- 形態： 円墳が約半数を占め、前方後円墳もかなり多い。
- 規模： 大規模（ここでは仮に100m以上とする）な古墳の割合が高い。（約  $\frac{1}{10}$ ）
- 時期： 前期に含まれるものはなく、中期が大部分を占めている。

まず、中期がほとんどで前・後期がごく少数であるということは、この古墳群が中期になって急速に姿を見せ、後期になるとほとんど築かれなくなったということである。もっとも、現段階では古墳の築造時期は明確でない点もあり、調査されずに壊されてしまった古墳もかなりあるので、厳密なこととは言えないかもしれないが、傾向としてこれは言えると思う。

次に規模であるが、これは形態とも兼ね合わせて、当時の権力者の規模の墓が多いということである。こんなことはわざわざ書かなくとも、世界最大の墳墓である大仙(大山)古墳をはじめ、

履中陵に指定されている百舌鳥陵山古墳などの天皇陵や他の陵墓参考地などから明瞭なことではあるが。

<疑問点>

調べているうちにはいろんな疑問が生まれてくる。例えば、前に中期の古墳が大部分であるということは述べたが、何故そうなっているのかとか、もっと素朴なもので言えば、大仙陵は本当に仁徳天皇の墓なのだろうかなどという、一種の「常識」のようなものまで疑っていくと、明確な答えが見つからないときがある。以下は、この疑問な箇所について調べたり考察したりしたことを述べてみようと思う。

1. なぜ、天皇陵よりも大きな（又は同規模）陵墓参考地などがあるのか。

(例) 田出井山古墳(反正陵) 全長 148 m  
 土師にさんざい古墳(陵墓参考地) 全長 290 m  
 御廟山古墳 全長 186 m      いたすけ古墳 全長 146 m

2. 1と関連して、天皇陵などの比定は正しいのか。
3. なぜ、2つの古墳群(百舌鳥・古市)が東西に同緯度の位置にあるのか。
4. なぜ、中期の古墳がほとんどなのか。＝何故中期になって急速に進出したのか。
5. なぜ、古墳は南西、又は東西に向いているのか。＝方向軸
6. 古墳築造の年代と権力者(天皇)の年代がずれているのではないか。
7. 南海高野線は、なぜ仁徳陵に接する部分だけ半地下を通るのか。

<疑問に対して>

- 1・2 どの古墳が誰の墓かということは、文書によって記載が違うものがあり、江戸時代には、今の反正陵を菟道(うじ)太子墓、土師にさんざい古墳を反正陵とする文書もあるもので、伝承のすべてが一致しているわけではない。

現在の比定は、『延喜式』(10世紀)の記事が元になっているが、これもそれ以前に成務陵と神功陵を取り違えていた事実があり、築造後数百年で奈良の天皇陵の比定があいまいになっているのだから、それ以後の『延喜式』は絶対的ではない。

つまり、古墳と被葬者とはいつの時代にも混同してしまい、現在の陵墓参考地と天皇陵が逆に比定されていた時代もあった。

- 3・5 次ページの図のように、二大古墳群が並んでいる。

古墳時代の海岸線はもっと手前だから、海上から古墳がよく見えたことは想像できる。5と関連して、古墳が南西方向を向いているのは、海上から長辺を見せてより大きく見せるためであり、船で海外から使節が難波に来たとすると、海上から巨大古墳を見た後、街道を通りもう一度巨大古墳を見ることになる。東西を向いている古墳もかなりあるのは、街道に平行に造り、やはりより大きく見せるためではなかろうか。それは、この国を治める王としての権威を示すためである。

なお、竹内街道などは古代、難波と都(飛鳥)とを結びいわば「主要道路」であった。

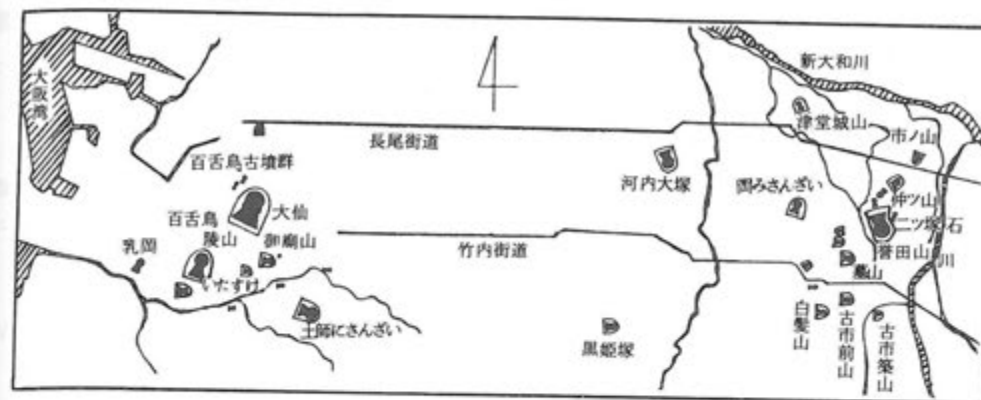


図2 百舌鳥・古市両古墳群分布図 「古墳」より

4. この古墳群が中期になって急速に姿を見せた理由としては、

A 河内の土地の重要性

- ・大和朝廷の軍事出兵 (404年 好太王の碑文)
- ・中国への遣使 (『宋書』の倭の五王など)



外交上の権威を示すため、政権の所在地こそ変わらないが、権力者たちの「墓地、だけ移動した。

B 王朝交替

奈良県の前期の大古墳を残した王権(三輪・イリ・初瀬)と河内の中期の大古墳を残した王朝(河内王朝)とは系譜が別である。

(例) 騎馬民族征服王朝説 など

の2つの対立したものが挙げられてきているが、Aが有力である。

自分としては、この意見に対して、いとも簡単に朝鮮への軍事出兵とか、『宋書』の「倭の五王」などが応神、仁徳以下の天皇の遣使のためであると言ってしまふのもどうかと思ってみたりもする。(話が複雑でややこしい)

もっとも、舞台を現代に置きかえてみると、関西新空港建設で泉南の重要性が高まるといことが言われているし、同じ様なことが古代にもあったのか、と考えると支持したいような気がする。

— 洪水が生んだ築造の技術 —

中期になって河内に進出した — 河内に注目すると、なぜ河内で造りうることができたのかという疑問が生じる。

古墳時代の大阪付近の状況は次の図と同様である。

縄文・弥生時代と、河内湖へ注ぐ河川の水量が洪水などで増えると、付近の集落は大被害を受けたことであろう。



図3 古代の大阪の地形

河内湖； 滋賀・京都南部・三重西部・奈良盆地の水を集め、注ぎ口は今の新大阪駅から千里山のふもとまでの狭い水道。はんらんが多かった。

6. 古墳の年代は、大仙陵を例にとると、この古墳の出土と思われる、獣帯鏡（銅製の鏡の一種）、環頭付の太刀の金具が、韓国の武寧（ふねい）王陵から発見されている。武寧王は523年に亡くなり、525年葬られたと記されているため、大仙陵も6世紀前半の古墳である可能性が高い。

しかし、仁徳天皇の時代とは、100年以上も違う。この年代の差はよく分からなかった。あるいは、もっと下った時代の天皇の墓であろうか。

ただ言えることは、さきほど述べたが、この古墳群の築造された年代は、自然の力を克服するに至った土木技術をもった王が支配し、ある程度統一が進んだ時代だろうということだ。あれだけの古墳を築くには、やはりそれだけの統制力を必要としただろうから。

7. 僕自身、毎日この部分を電車を通っているが、なるほどこの部分はそれまでより低くなっている。ちょうど谷の様にくぼんだ所を電車を通っている。

僕の考えたこの理由としては、この南海高野線の前身「高野鉄道」が堺東～河内長野に開通したのは明治31年。天皇の権力の強い時代だった。つまり、明治時代につくられたものなので、天皇陵を仰ぐ—見上げる—格好で、天皇陵の近くを通ることが許されたのではないだろうか。勝手な推論だけれども。

#### IV 結論

この古墳群は、古墳時代中期、大和王権が成立してその権力が大きくなり、海外との交流が行われたとされている時代に出現した古墳群である。

この古墳群—特に巨大古墳が築かれた背景には、弥生時代以来、この地でつちかわれた治水による土木工事の発達があった。そして、支配者の強力な権力のもとで築造されたものなのだ。もし、河内湖の氾濫がなければ、この巨大古墳の築造は不可能であったであろう。人間は環境が悪いと、何とかしてそれを克服しようとする。工夫・創意はここから生まれる。この古墳群、特に大仙古墳などの巨大古墳は、当時の人々の知恵の結晶である。古代人の英

古墳時代、巨大古墳が築造されると相前後して、この地盤の固い上町台地に堀を掘り、水を大阪湾へ直接流すことにより河内湖の水位を安定させた。

この堀が現在の大阪市街を流れる大川と言われている。

そして、この治水の技術、土木工事の技術が巨大古墳の築造を可能にさせた。仁徳天皇が茨田（まんた）堤を築いたということは、この点で興味深い。

知が古墳という形で表われているのである。そしてこの後、古代国家が成立し、律令時代に入る。

現在、土木技術も進み、ブルドーザーなどの機械もあるが、これほど巧みに、そして千数百年の年月に耐えるものをつくるということは、やはり大変なことではないだろうか。

しかし、後世の人間はこの貴重な遺産を壊してきた。特にこの時代は。

当時のあらゆる技術、遺物などの世界の文化、古代人の苦勞……そういうものを結集して造られた古墳を安易に壊してしまっは、いけない。

#### V 総括

(1) これからの課題

この古墳群は築造以来、何度か受難を受けている。

- ・中世 塚の堀を埋める土 複古墳（77m）など
- ・近世 幕末の修陵、開墾などによる形態の変化
- ・大戦以後 周囲の宅地化につれての小古墳の破壊

中でも大戦以後の「破壊ブーム」はすさまじいものだった。調査もされずに破壊された古墳は実に20数基を数える。そのうちのいくつかは形態さえも分からない。その中でいたすけ古墳のように破壊をまぬがれたのは極めてまれである。

古墳は貴重な文化遺産である。これを破壊する開発を阻止しなければいけない。

(2) 反省・感想

一応、百舌鳥古墳群についての調査は終わったが、もう一つ完遂感がない。非常に大きすぎたテーマであり、自分で思うように行かなかったというのが本音である。

(2)の実地調査だが、度重なる大雨と日程とのやりくりで、もう一つまとめられずうまくいかなかった。反省すべき点である。